

第4回 外国語コンテスト

英語部門

英語のコンテスト審査はここ数年、発音やアクセントだけでなく、歌唱力も評価してきた。どれだけ本物「らしく」歌うかをそれなりに重視してきたわけだ。そのせいいかどうか分からないが、参加者に占めるバンドの経験者の割合はかなりのものである。こうなると、どれだけ歌い慣れているかも入賞の大きな分かれ目になる。英語コンテストの入賞基準としてどうかという意見もあるだろう。だが、歌詞を暗記し歌手の歌い方を真似ることも、英語力アップの大事なステップではないだろうか。

今年の入賞者3人が歌ったのはサイモンとガーファンクル、チャック・ベリー、エリック・クラプトン。エリック・クラプトンの曲以外は、古典的とも言えるスタンダード・ナンバーだ。チャック・ベリーを歌ったM君はリズム・アンド・ブルースの醍醐味を満喫させてくれたし、他の2人もラブ・ソングと最愛の息子を事故で失った悲しみの歌をじっくりと聞かせてくれた。大変ハイ・レベルのコンテストだったと思う。入賞を逃した皆さんの多くも、当確線ギリギリで、審査は難航した。来年以後も、元気な皆さんの多数の参加を望みます。また、平尾先生と職員の皆さん、名城大学の皆さんも歌と演奏でコンテストに花を添えて頂きました。有難うございました。

- 1位 壁谷 勢太（4年）
- 2位 水野 智降（3年）
- 3位 伊藤 孝（1年）
永田 知巳（1年）
武藤 宗洋（1年）

（緒方康）

ドイツ語部門

12月11日（全）208番教室で第4回外国語コンテスト・ドイツ語部門本選が開催された。課題は、ドイツ歌曲中の名歌シューベルトの「冬の旅」の中のST” ANDCHENとドイツの名優マレーネ・ディートリッヒの歌ったLILI MARLEENのいずれか1曲の歌唱である。審査は経営学部客員教授クボタ=ミユラー先生に務めていただいた。前者は切々としかも物悲しく、清冽に、描しがたい恋心を歌い上げるフィッシャー・ディスカウの清み渡った歌声が、後者は厭戦的な気分の色濃い戦場の兵士がかつての恋人を思い歌う気だるいマレーネ・ディートリッヒの慕情が、かつて人々の心を深く揺り動かした名曲である。

今回のコンテスト出場者は残念ながら例年に比べて少なく、今泉幸映（1年）、安藤康弘、三津伸枝、吉田将之、箕浦明希子、山本響子、八田信（2年）、平山宗也（3年）君の8名だった。第1次選考、第2次選考を経て、入賞者にはLili Marleenを歌った山本響子さんと安藤康弘君が、難しい歌曲St” andchenを見事に歌い上げた三津伸枝さんが選ばれた。

入賞者は12月15日（火）開催の表彰式で発表され、優勝山本響子さん、準優勝三津伸枝さん、第3位安藤康弘君に、名古屋語学教育研究室長を通して、石井吉也学長の表彰状と賞品が授与された。表彰式の後、優勝者による発表会が引き続き行われ、山本響子さんは、戦場に駆り出され、虚しい戦いに苦しむ兵士の憂愁と、かつて束の間の出会いの一時に愛し合った女性を思う恋心を見事に表現し、感動を呼んだ。

今回のコンテスト開催にご協力下さった教職員の方々、果敢に課題曲に挑戦し、出場してくれた学生の皆さんには心よりお礼を申し上げます。

（竹中克英）

フランス語部門

今回のコンクールには2年生2名、3年生7名、4年生1名、計10名の応募があった。一位2年川内まりこさん、2位3年山田歳徳君、3位3年松尾錠治君であった。全応募者に、ポール・ヴェルレーヌの詩 *Il pleure dans mon coeur...* (都に雨の降るとく...) の朗唱をしてもらった。

この詩の朗唱上の困難はまず第一に発音、とりわけ [l] と [r]、[si] と [ji] の違いをいかにうまく区別できるか、そして鼻母音をいかにうまく発音するかである。第二は、韻、音調、間合い、イントネーションに注意しながら詩のもつ音楽的感興をいかに強調できるかである。第三には、この詩の意味を理解したうえで、たとえフランス語がわからない人がいても、音の響きによってだけでもいかに聴衆を感動させるかということである。この詩は長くはないが、応募者にはかなり難しかったところがあったかとも思われる。川内さんだけがとりわけ発音がうまく、上手に表現ができた。2、3位は準備はよくしていたと思われるが、発音と発表のしかたにもうひとつ努力が足りなかった。その他の発表者については、大きな違いはなく、ランクづけは困難であった。

(ラッセン、河原)

中国語部門

「第四回外国語コンテスト」(中国語部門)は、十二月十日木曜日午後一時三十分より、213教室にて開催した。今年度から、教養部廃止に伴い、本コンテストの主催が名古屋語学教育研究室となったことから、現代中国学部の学生も参加できるようになった。ただし、法学部・経営学部と現代中国学部とでは、中国語の学習環境(授業時間数・ひとクラスあたりの学生数、など)という点で、かなりの差があるため、法学部・経営学部部門と現代中国学部とに分けて実施することにした。

参加者を募ったところ、法学部・経営学部部門には14名(うち1名辞退)、現代中国学部

部門には10名(うち2名辞退)の積極的な応募があった。

コンテストの内容は、参加者に予め渡してある課題文を朗読してもらう、というものである。課題文の題名は以下の通りである。

現代中国学部部門「好极了」

法学部・経営学部部門(一年生)「喝酒」

同(二年生)「城里人的拳夫」

審査員は、現代中国学部の藤森猛先生・王硯農先生・中川裕三先生・安部悟先生にお願いした。

まず初めに、現代中国学部部門の学生に朗読してもらい、十分間の休憩をはさんで、法学部・経営学部部門の一年生、同じく二年生の順で行った。さすがに現代中国学部の学生は、中国語を専門的に学んでいるだけあって、発音・声調とも安定度が高く、実に流暢なものであった。法学部・経営学部の学生のなかには、「カルチャーショックを受けた」と話す者もあり、かなりの刺激を受けたようであった。法学部・経営学部の学生も、必ずしも恵まれた学習環境にあるわけではないなかで、かなり善戦していた方だと思うが、やはりまだまだ発音・声調ともに安定感を欠いていた。この点は、教える側もおおいに反省し、今後の授業に活かしていきたいと思う。

発表後、審査員の先生方から講評を頂いた。

藤森先生からは、主に法学部・経営学部の学生に対して、発音については基本的にはまずまずであったが、声調についてはまだまだ不完全であったこと、発音の練習では特に声調を重視するように、との指摘を中国語により頂いた。

王硯農先生からは、やはり法学部・経営学部の学生に対して、例えば「dou」なのか「duo」なのか、母音の区別がはっきりしていなかったことを例に挙げられ、個々の単語の発音(特に母音)をもう少し明瞭にすべきとの指摘がなされた。そしてさらに、これからはしっかりと練習していけば、みなさんならきっと、ますます上手に話せるようになると思います、との励ましの言葉を頂いた。もちろん中国語で。

中川先生からは、まず現代中国学部の学生に対して、みなそれぞれ上手であったが、発音がすご

くよいというわけではない、との更なる進歩を期待した言葉がかけられた。一方、法学部・経営学部の学生に対しては、やはり声調の不安定さについての指摘がなされ、テープをよく聞いて真似をするように、また発音の基礎をおさえて練習すればもっとよくなるはずだ、との励ましの言葉を頂いた。

安部先生からは、まず現代中国学部の学生に対して、実力が伯仲していたこと、しかしまだまだ完璧ではない、とのやはり更なる進歩を期待した言葉がかけられた。一方、法学部・経営学部の学生に対しては、テープなどを活用し、いい発音をたくさん聞いて、耳慣れをすることの重要性を指摘され、さらに自分の発音を録音し、実際の発音と比較してみることも効果的な学習方法である、との教えを頂いた。

今回は、初めにも述べたように、初めて現代中国学部の学生の参加があり、とりわけ法学部・経営学部の学生にとっては、実により刺激になったと思われる。これを機に、中国語を通じての学部を越えた交流が益々盛んになることを心から希望したいと思う。

なお、入賞者は以下の通りである（学年は実施時のもの）。

現代中国学部部門

- 第1位 仲庭 祥織子（現代中国学部 2年）
- 第2位 森 謙二（現代中国学部 3年）
- 第3位 翠 まゆ子（現代中国学部 2年）

法学部・経営学部部門

- 第1位 清原 早苗（経営学部 2年）
- 第2位 田中 洋平（経営学部 2年）
- 第3位 猪飼 義臣（法学部 1年）

（矢田博士）

韓国・朝鮮語の部

第4回外国語コンテスト、韓国・朝鮮語の部は、'98.12.10（木）午後開催され、陶山・常石両審査委員立会いのもと、20名もの参加学生と多数の聴衆で会場は熱気にあふれました。今回、第4回の「総評」を示すとすれば、次の二点を挙

げることが出来ます。

第一点、車道校舎から5名もの学生参加があったこと、および、一位と二位をこの車道校舎の学生がさらっていった点。今後も、車道校舎の学生諸君の参加と健闘を期待します。

第二点は、「下手」というか、もともと決して発音がうまいとはいえない学生諸君が積極的に参加してくれた点です。君たちの努力の成果を、教師だけはよく知っています。教育の一環としての外国語コンテストは、君たちの参加によってこそ、その目的の一面が充分に果たされているのです。

第4回コンテストの入賞者は次の通り。

- 一位 高橋 ひろみ 車道 98SJ1020 1年生
- 二位 宮崎 央 車道 97SJ1201 2年生
- 三位 本郷絵里奈 名古屋 97J1341 2年生

新入生の皆さん、詳細は韓国・朝鮮語の授業のなかで説明しますが、愛知大学では毎年こうした外国語コンテストを秋学期に実施しますので、発音に自信がある人も、自信がない人もぜひ参加しましょう。

（常石希望）

日本語部門

「日本語スピーチコンテスト」は、十二月十日（木）午後開催されました。「留学生の見た日本」というメインタイトルのもと、参加学生それぞれがサブタイトルをつけ、自分の体験を思いを込めて発表しました。来日して数年を経、さまざまな出来事を体験してきた留学生にとっては、日頃の自分の思い、考えを知らせるいい機会だったでしょうし、同時に、聴衆の日本人学生にとっては外から見た日本を知らされる、これもまた良い機会であったようです。

審査は、「日本語」担当の大西、山本委員に加え、法学部から一名、現代中国学部から二名の学生が学生委員として同世代の眼で見た評価を加えました。

コンテストの入賞者はつぎの通りです。（入賞者のスピーチは後に掲載します。）

- 一位 舒治雪

二位 単俊飛

(山本雅子)

日本語コンテスト入賞作

第一位 廃棄物に思う

現代中国学部3年 舒 治雪

皆さん、こんにちは。今日、私は廃棄物について皆さんに聞いていただきたいと思います。

廃棄物と言えば、皆さんの頭の中になにを思い浮かべますか。いらぬもの、使われないものなどでしょう。でも、日本の廃棄物は本当に使われないものなのでしょうか。

ごみが捨てられた場所へ行けば、すぐ分かります。まだ使える古い車やパソコン、家電用品、それから家具などが、たくさん捨てられているでしょう。そして、粗大ゴミの山は益々高くなり、ごみの処分のために日本政府は頭を抱えています。これは言うまでもなく、皆さんご存知のことだと思います。

では、食べ物の廃棄物についてはどうでしょうか。今、ここで聞いて下さっている皆さんの中にはコンビニやスーパーでアルバイトをしている方もいると思います。私は最近コンビニでアルバイトをしています。仕事は順調にやっていますが、廃棄物の問題についてはちょっと違和感を待っています。それは毎日コンビニの食品の廃棄時間のことです。実は、最初の日からこんなことがありました。仕事が終わって、帰ろうと思っていた時に、一緒に仕事している人が私に「舒さん、ごみを出して。」と言いました。よく見ると倉庫中に二つ黒いごみ袋がありました、ぎっしりと弁当やケーキ、サンドイッチなどが詰まっていました。

「これは...ごみ？」と私は自分の目を疑いました。その人は「仕方がない、賞味期限が過ぎたから。」と言いました。「もう腐りましたか。」と私は聞きました。「いや、そうじゃない、賞味期限は食物が美味しく食べれる期間だ、多少時間が過ぎても、品質上の問題はないけど」と、その方は答えました。「産業廃棄物って焼却されますか？」と私はその人にしつこく聞きました。「そうですね、生物だから。最近堆肥としてリサイク

ルする人もいます。」と答えてくれました。

実は、朝10時賞味期限のものは10時前すでに廃棄してしまいました。同じように、午前11時前や午後6時前などのものはその時間前全部廃棄しました。その店のオーナーに会って、「賞味期限前に半額に処分したら」と私が提議しました。

「いや、絶対しない。これはうち店の方針だ。」とオーナーさんがキッパリ断りました。

白いご飯、狐色に揚げられた唐揚げ、すてきなケーキ、おいしいそうなサンドイッチ。さっきまで商品だったのに、今はごみ。堆肥の仲間入り。どう見ても私は納得できません。中国にいた時、日本のテレビドラマ「おしん」の主人公が食べ物のために、生きるのために幼い時から家を出て、働く姿に大変感動しました。涙を流しながら、それを見ました。今は、もったいないなと思いながら、ごみ袋に私は弁当を捨てています。きれいに盛り付けた弁当はまるで踏み潰された花のように、無残な姿になってしまいました。

私は戦争の炊け野原から今日の日本を建てた人々に敬意を払うけれども、むやみにものを無駄にする人はどうも好きになりません。日本は豊かな国と言われています。その豊かさは決して空から降って来たものではありません。物を大切にしなければなりません。高度成長をしている日本は「大量消費、大量生産、」のアメリカ流の経済を取入れ、大量の資源を無駄にしてきました。

二つのごみ袋は風船のように膨らんでいました。台車に乗せるとき、中から「ギュー、ギュー」と弁当の泣き声が耳に入りました。よその国では、餓死する人もいますよ」と私は思わず叫びたくなるような気持ちになります。白いご飯、狐色の唐揚げ、すてきなケーキ、もともとこれらは人のために作ったもののなのに、燃やすと、二酸化炭素など、とんでもない物に変身してしまいます。

「もう終わったか？」と店長は様子を見に来ました。台車を押しながら、私は店長に「お弁当が泣いていますよ」と言いました。不思議そうに店長は私を見て、「そうね、全部で三万円だ。」と言いました。

これで私のスピーチを終わらせていただきたい